円窓付土器

弥生時代中期

円窓付土器は、体部上位に大きな楕円形の孔をもつ壺形土器である。口縁や頸部に刺突文や数条の沈線をめぐらせるものもあるが、全般的に装飾的な文様は少ない。尾張地域を中心に分布しているが、その大半は朝日遺跡で出土したものである。弥生時代中期後葉の墓域とその周辺から出土することが多く、居住域で見つかることは少ない。

また、焼成後に穿孔されるものがあること、屋外に放置され風雨にさらされていたことを示す「風化痕」がみられるなど、墓に供えられていた土器と共通する特徴が認められ、墓域での祭祀に用いられた土器と考えられている。

台付円窓付土器

史跡貝殻山貝塚に隣接する地点の発掘調査では、比較的限定された範囲で多量の円窓付土器が出土している。